

# HSE リスク・シーキューブ 第5回 理事会 議事録

日時：平成20年 6月21日（土）13時30分～15時

場所：東海村合同庁舎 303会議室

出席：谷口，佐藤，土屋，小宮山，清水，中村

## 1) 平成19年度事業報告案について

土屋副代表理事より、通常総会で報告する平成19年度事業報告案が紹介された。

清水：村と茨城大の講座に参加したことは事業活動に含まれないのか？

谷口：例えば、村のシンポジウムのように企画や実施を手伝った場合は事業活動になるが、単に参加者として聴講しただけでは活動に加えない。また、土屋副代表理事は電力中央研究所の研究者として講師をしているため、ここには加えない。

小宮山：19年度の年度計画がないので比較できない。

谷口：内閣府に提出する資料はこの形式であるが、次回から参考資料として添付するようにする。

小宮山：ホームページは19年度に行ったことか？

土屋：年度が6月から5月となっているため、昨年6月に更新したホームページは、18年度に更新の計画を記述し、19年度に実施したことになる。

谷口：昨年6月に作り直したが、不具合があって最新情報が更新できていない。近いうちに見直して、機能するようにしたい。

小宮山：プロジェクトの情報はどうなっているのか？

谷口：前のアドレスのところに残してある。

中村：ホームページは情報の更新が重要。更新作業をする人が必要ではないか。

谷口：ボランティアのような形で人材を確保したいが、好きでないとなかなかできない作業である。

小宮山：自分のホームページにリンクしたい。

谷口：リンクはOK。情報管理の問題から研究所で作業ができないのが問題だが、今後よいものに作り替えていきたい。

中村：視察報告などの扱いが難しいのではないか？

土屋：何を公開するかは決めており、事業所にも確認をとって公開している。

## 2) 平成19年度収支決算報告案について

土屋副代表理事より、19年度収支決算報告案が紹介された。カラー印刷にしてもあまり印刷費がかかっていないことから、出来るだけ多くの人に広報誌を届けるための方策について、様々なアイデアが出された。小宮山・清水理事から、プロジェクト時のように全戸配布を希望する意見が出されたが、全戸となると非常に多額の費用がかかるため、総会時にアイデアを求めることになった。

## 3) 平成20年度計画と予算案について

土屋副代表理事より、平成20年度活動計画と予算案が紹介された。

小宮山：柏桃の輪との交流会は含まれないのか？

土屋：どの活動に位置付けるか、明確ではなかったので加えていない。

谷口：企画などもしているのだから、「リスクコミュニケーション活動の計画支援・実施支援」に入れてはどうか？ 支援事業の事業費を追加してはどうか？

小宮山：しーきゅうぶとして交流会を目玉の事業にするとよいと思う。

清水：収入を得るという観点から、リスクコミュニケーションについての冊子をつくって1部500円くらいで販売してはどうか？ 理論的なところと、自分たちがやってきた活動が簡単に読めるようなおしゃれな冊子が良いと思う。

佐藤：誰を対象につくるのか？

清水：一般市民を対象にする。今までやってきた活動を素敵な冊子にまとめたらよいと思う。

土屋：どういう体制で作成するのか？

清水：収入源が必要だと思うので、小冊子をつくるワーキングを設けてつくればよいと思う。

土屋：広報誌のときに床井さんが中心になってくださったように、誰か中心になってやる人がいないと難しいと思う。

清水：1～2年ぐらいかかると思うが、やってみてはどうか？

佐藤：誰が冊子を購入してくれるか、ということを見ると、自分たちと同じような活動をしている人だと思う。他の地域での支部の設立という話はどうなっているのか？

谷口：今のところ問い合わせはきていない。研究プロジェクトのときと状況が異なっているので、積極的に声をかけていないのも事実である。ただし、柏崎などには、柏桃の輪のように別の目的をもって活動している団体があり、新たにつくるということはなかなか難しい。

佐藤：保安院の方は動いていないのか？

土屋：保安院の活動は新しいグループをつくるという方向には進んでない。せいぜい交流会をする程度である。

谷口：環境自治体会議はひとつのきっかけだったと思う。島根も泊も誰か中心になって活動する人が必要である。

佐藤：世の中の流れとして、行政主導・国主導でこのような活動を支援するというのはないのか？

中村：新しい団体をつくるのは難しい。既存の団体で似たような活動をしているところがあるのではないかと？ そういうところとネットワークをつくるのはどうか？ 交流会が役立つと思う。

谷口：柏崎との交流会は重要である。こちらがいろいろなところと交流経験をもって学ぶこともあるのではないかと。

佐藤：冊子をつくるなら、一般の人向けというより同じ活動をしている人向けにつくるとよいのではないかと。

清水：冊子にまとめると、活動のプロセスがわかるのでよいと思う。お金をかけなくても資料のようなものでもよいかもしれない。

佐藤：まだ活動が広がっていないので、購入者がいないと思う。

清水：ホッチキス止めでもよい。半分カンパで購入してもらおう。

中村：お金をとれるものができるのか心配。

小宮山：冊子をつくることには反対しないが、中身をどうするかという点とマンパワーに問題が

ある。冊子の前に広報誌で活動の実績を残している。去年村のシンポジウムで配布したが、あつという間になくなった。もっと配布できればよかった。また、2回目の視察がはじまったが、これ以上何ができるのか、という気持ちもある。交流会で新しい視点を得たいと思う。新しいやり方のようなものが出てくるとよい。

清水：「〇〇の歩み」のような冊子でよいのではないか。

谷口：内容は視察を束ねたものでもよいだろう。視察が一巡したので、今後は他地域と購入できるようにするとよい。たとえば、視察を1回にして、他の地域へ行くことを視察に次ぐ活動として位置付けることもある。

土屋：柏桃の輪は、「フォーラム・エネルギーを考える」から旅費などの支援を受けている。

中村：他地域の見学は我々にも役立つと思う。いろいろな目で見えて意見を出してもらうことはよい。ただし、地域の団体にはいろいろなものがあり、建設的な議論ができる場所を選ぶ必要がある。

土屋：今回は、交流会前にこちらの活動を紹介する時間をとってもらっている。こちらの活動をよく知った上で交流してもらえるところにしたい。

谷口：発電所の内部はどこも見ることができないが、たとえば浜岡の耐震補強工事などは興味深いかもしれない。今後は他地域へ行くことを年1回行うということでもよいかもしれない。

小宮山：交互に行くなら2年に1回。CPFの視察ではもうほとんど問題点が見つからないので、視察レポートに書くことがないと感じている。視察の切り口を新しくするという点で、違った視点、違った場所の見学も必要。

谷口：見学も重要だが、他の地域の住民と話をすることも重要ではないか。次の視察場所は決まっているのか？

清水：常陸大宮のフィールドはどうだろうか？

土屋：まだ次の視察場所は決まっていない。

中村：JCO事故以後は、視察の切り口がはっきりしていたが、ほとんど改善された。今後は耐震という切り口もあるのではないか？ 個人的にもどんな対策が行われているのか知りたい。

(ここで15時になったため総会の準備に入った。)